

司式 杉山昌樹牧師

前 奏

奏楽 五十嵐美代枝姉

開 会 招 詞 イザヤ40章28-31節

\* 賛 美 歌 1:1 (ソングシート)

1. われら主をたたえまし、きよき御名あがめばや、くる日ごとほめうたわん、  
神にまし王にます 主のみいつたぐいなし。アーメン

\* 開 会 祈 禱

罪 の 告 白 祈禱書2 罪の告白①

神よ、わたしを憐れんでください。御慈しみをもって。深い御憐れみをもって、背きの罪をぬぐい去ってください。わたしの咎をことごとく洗い、罪から清めてください。わたしは咎のうちに産み落とされ、母がわたしを身ごもったときも、わたしは罪のうちにあったのです。わたしを洗ってください。雪よりも白くなるように。神よ、わたしの内に清い心を創造し、新しく確かな霊をさずけてください。救いの喜びを再びわたしに味わわせ、自由の霊によって支えてください。主よ、わたしの唇を開いてください。この口は、あなたの賛美を歌います。 主イエス・キリストの御名によって。アーメン。 (詩編51)

罪の赦しの宣言

十 戒 祈禱書4

1. あなたは、わたしのほかに、何者をも神としてはならない。
2. あなたは自分のために刻んだ像を造ってはならない。それにひれ伏してはならない。それに仕えてはならない。
3. あなたは、あなたの神、主の名を、みだりに唱えてはならない。主は、み名をみだりに唱える者を、罰しないではおかない。
4. 安息日をおぼえて、これを聖とせよ。
5. あなたの父と母を敬え。
6. あなたは殺してはならない。
7. あなたは姦淫してはならない。
8. あなたは盗んではならない。
9. あなたは隣人について偽証してはならない。
10. あなたは隣人の家をむさぼってはならない。隣人の妻、またすべて隣人のものをむさぼってはならない。 (出エジプト20、申命記5)

\* 賛 美 歌 1:2 (ソングシート)

2. 世は世へとうたいつぎ、よろこびとおそれもて 主のくしきわぎをつげ、いつくしみ知れるもの  
みさかえをほめたたう。 アーメン

公 同 の 祈 禱 祈禱書 5 使徒信条

われは天地の造り主、全能の父なる神を信ず。

われは、そのひとり子、われらの主イエス・キリストを信ず。主は、聖霊によりて宿り、おとめマリアより生まれ、ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ、死にて葬られ、よみに降り、三日目に死人のうちよりよみがえり、天に昇り、全能の父なる神の右に座したまえり。かしこより来たりて、生ける者と死ねる者とを審きたまわん。

われは聖霊を信ず。聖なる共同の教会、聖徒のまじわり、罪の赦し、からだのよみがえり、とこしえの命を信ず。アーメン。

献 金 (黒) 教会活動 (赤) 九州伝道 70

今献ぐるそなえものを 主よ 清めて受けたまえ アーメン

聖書朗読 詩編42章2-9節 (旧約聖書875頁)

ルカ4章1-12節 (新約聖書107頁)

説教・祈祷 「神の命と生きる」 杉山昌樹牧師

\* 賛美歌 39:1-2

1. わが身の望みは ただ主にかかれり、主イエスの外には 依るべき方なし。

(おりかえし) わが君イエスこそ 救いの岩なれ、救いの岩なれ。

2. 風いと激しく 波立つ闇夜も、みもとに碇を おろして安らわん。(おりかえし) アーメン

\* 主の祈り 祈祷書1

天にまします我らの父よ

願わくは御名をあがめさせたまえ

御国を来たらせたまえ 御心の天になるごとく 地にもなさせたまえ

我らの日用の糧を 今日も与えたまえ

我らに罪を犯す者を我らが赦すごとく 我らの罪をも赦したまえ

我らを試みに会わせず 悪より救い出したまえ

国と力と栄えとは 限りなく汝のものなればなり アーメン。

\* 頌 栄 63

あめつちこぞりて かしこみたたえよ、みめぐみあふるる 父、み子、みたまを。アーメン

\* 祝 禱

後 奏 (黙禱)

報 告 古澤純一長老 (司会・受付 次週：門脇献一長老)

本日 受付 1階：古澤迪子・森永美保執事 2階：佐藤紀子執事 / ZOOMホスト・録音：大日南信也

次週 受付 1階：星野房子・加藤良明執事 2階：大日南信也執事 / ZOOMホスト・録音：大日南悠

※ グループ制により、長老も1階と2階に一名ずつ加わります。

## ルカ4：1-13 「神の命と生きる」

### 神の命はどこから

今日は今年の教会テーマ「キリストの命溢れる教会」について、このルカによる福音書から聞いていきたいと願っています。そもそも「命溢れる」とは何かということです。教会において生き生きと命が躍動している状態、ああ生きていけるなと実感できればそれほど嬉しいことはありません。そんな教会の中心に何があるのかです。その場合に「キリストの命」ということでは例えばローマ書に「キリスト・イエスによって命をもたらす霊の法則が、罪と死との法則からあなたを解放したからです。」

(8：2)という言葉があります。解放ですから、自由です。より自分らしく、おかしなものに囚われずに生きていく、そのような生き方にあなたたちは入れられている、とパウロは言うのです。そのような自由なありかたの先頭を走っているのがイエス様です。今日は、このルカによる福音書からまずはイエス様が何をされているのかを確かめて、私たちもまた一緒に自由になっていく、そんな生き方を読み取ってみたいのです。

### 神の子として

ルカのこの所はある意味ではイエス様のいわゆる公生涯、人々に神の国を宣べ伝えるお働きの手前、その最後の仕上げと位置付けることができます。これに先立って3章では洗礼がありました。そこで、「あなたは私の愛する子、私の心に適う者」という神様の声が響きました。さらに、その後では、系図が語られていました。これはでたらめにこのような順番になっているわけではありません。二つをつなげる言葉があります。それは「子」という言葉です。系図はマタイによる福音書にもありますけれども、ルカの関心は「子」という言葉に現れます。例えば23節に「ヨセフの子と思われていた」とあります。人々はそう思っていた、でも違う、と言いたいのです。この系図の特徴は、だんだんと代をさかのぼっていること、そして何よりも、マタイはアブラハムまでしか遡らないのに対して、神様までさかのぼっているという点にあります。何が言いたいのかははっきりしています。イエス様は、神様が愛される、神の子だ、という事実をはっきりとさせているのです。そして、このイエス様に連なる私たちもまた、この系図に連なっているのです。その点ではわたしたちもまた神様の愛する子の一人になっているのです。そのような神様の愛する子が、この世で生きていく時に何を大切にするのか、ということを実地で示しているのが、この誘惑の箇所、ということになります。そして、この誘惑においても問われているのは、神の子とは何か、です。悪魔は、一つ目と三つ目の誘惑でたずねています「神の子なら」

(3, 9節)と。悪魔は悪魔として神の子なら、こうするべきではないのか、というように誘っているのです。そこで神の子らしさが問われているのです。

### 人は何によって生きるか

そこで聖書を見ますと、書き出しの1, 2節で、イエス様は、四〇日間悪魔に引き回され、その間食事をとらなかつた、とあります。マタイでは、はっきりと断食をした、となっていますけれども、事態としてはほぼ同じです。その結果空腹を覚えられた、というところも同じです。その状態で最初の誘惑が語られています。それは有名な石をパンに変えてはどうか、という誘いです。私が思いますのは、おそらくこのところに、すでに全体の方向性、すなわち、三つの誘惑を貫くテーマが表れているのではないかと、とういことです。どういうことかと言いますと、それは、何を第一にするのかということ。或いは、神様を計算に入れるかどうか、です。この場合、まずは空腹であるという現実があります。わざわざ、「空腹を覚えられた」と書いてあるくらいですからそれは間違いありません。イエス様ご自身空腹を感じられていたのです。或いは、私たちにしましても、自分が空腹、あるいは家族で空腹というときに、それをまずは満たさなければ、と思うのは自然なことです。さらに言いますと、人が食べ物なしでは生きられないのも事実です。そこで問題は、本当にまずは食べ物、何があなくても、食べ物、それがあってようやく他のこと、という順番でいいのかです。少し前に、池田三四郎という民芸家具を日本に根付かせた方の本をよみました。その人がある講演を聞いた時の感動を語った言葉を少しご紹介します。「戦後の日本人の多くが人倫、道徳も思想も信仰も忘れ果てて、ただその日の食に追われ、人格も何も考えず闇市の中に彷徨する姿に半ば絶望的な心境にあった私は、まさに青天のへきれきともいえ

る感動を得た」。みんながみんな、食べ物のことだけを考えている中で息が詰まりそうだった、死にそうだった、というのです。そこで出会った講演の言葉によって光が射しこんできたというのです。

パンは大切だが

ここに、人は何によって生きるのかについてのヒントがありそうです。聖書に戻りますとイエス様は、この誘惑に聖書の言葉をもって答えています。イエス様が引いた、もともとの旧約聖書申命記8章を読んでみます。「主はあなたを苦しめ、飢えさせ、あなたも先祖も味わったことのないマナを食べさせられた。人はパンだけで生きるのではなく、人は主の口から出るすべての言葉によって生きることをあなたに知らせるためであった。」(申命記8:3)。これは、40年間の荒れ野の旅を終えて約束の地に入っていこうとするイスラエルの民に与えられた言葉でした。神さまは、荒れ野でイスラエルの民を試しました。その中に飢え、欠乏もありました。しかし、そのような民の必要を結果として神様は満たしてくださいました。その上で特に目を止めたいのは「言葉によって生きていくことを知らせるため」、とあるところです。試みの目的、それは、当然ですが、苦しめるためではなく、むしろ、神様の言葉によって生きる、生き生きとする、このことを知っていくためだった、というのです。そして、このことは、私たちにとりましても、やはり体得していくもの、からだをはって知っていくものはずなのです。

具体的な歩みの中で

ところで私たちには、それぞれ、具体的な人生があります。様々な出会いと導きを経て、多くの場合、仕事についたり、家庭を持ったりします。もちろんそれ以外の生き方もあるかもしれません。独身を貫く方もいるでしょうし、牧師や宣教師といった特別な奉仕に携わる人もいます。いずれにしても私たち改革派教会においては、それぞれがあたえられた環境に召し出された、神様がそこにおいてくださったものと受け止めます。その所で、神様の子らしく生きていくのです。そこでしかし、神様の子らしく、というよりは、まずは、目の前のしごとを軌道に乗せなくては、となっていく可能性は、誰にでもあります。私自身、毎週説教原稿を考える時に、ふと、どのように語れるだろうか、どんなまとめ方ができるだろうか、ということにばかり思いが向いてしまうことがあります。まずはこの場を何とかする、という方向に向かいかねないのです。しかし、そのようなところで、イエス様の声を聞くのです。「人はパンだけで生きるものではない」という声を聞くのです。目の前の現実ですとか、自分の知恵、地上にある何かで間に合わせるのではなく、神様からくる言葉に聞く、ということへと目を向けさせられるのです。

政治的権威でなく

同じように、地上にあるもので完結しようとするのか、それとも神様からの声に聴くのか、ということは、続く二つの誘惑にもそのまま当てはまります。たとえば二番目の誘惑として悪魔は、イエス様を高いところに引き上げ、一瞬で様々な王国の様子を見せつけます。そして、そのような国々の権力と繁栄と与えるというのです。ただし、悪魔を跪いて拝めば、という条件付です。ここでも事態ははっきりとしています。神様をわきにおいて、この地上で地位を確かにしてしまおう、というのです。悪魔の誘惑は、とても实际的です。イエス様が活動を始められるこの時に、聖霊に満たされて、人々に語り掛けられようとしている、このタイミングで、世界に新しく神の国のおとずれを宣言していこうとしているその前に、みんなが言うことを聞いてくれるようにしてあげようというのです。このように悪魔は、意味がなさそうなことや、生きるのに邪魔になりそうなことに誘うのではないのです。むしろ、こうしたほうがよさそうなことをささやくのです。まずはこの地上の世界だろう、というのです。実際に地上の支配ということと言えますと、もしそのように、みんなが最初から誰かれなくイエス様にひれ伏してくれるのなら、そんなに楽なことはないのです。そしてもし、そうであれば、そもそも、私たちがなかなか伝道が進まない、教会に人が来てくれない、と悩む必要もないかもしれないのです。最初から、イエス様こそ権威の中心なのですから。しかし、その選択をする時には、イエス様は地上の王になってしまい、私たちもまた、神様とは関係のない者になってしまうのです。そこでイエス様は申命記6章からの言葉を語られます。「ただ主に仕えよ」という言葉です。神様とつながっていることを第一にすると

いうのです。

守りを試す？

最後に悪魔は、三番目の誘惑として神殿の屋根の上にイエス様を連れて行って、そこから飛び降りるようにと促します。そこで死ぬことなく神の子らしく守られることを試してみろ、というのです。ここでは悪魔は巧妙なことに、詩編の言葉を使って自分の提案を正当化しようとしています。ちなみにもととの詩編の言葉はこうです。「主はあなたのために、御使いに命じて／あなたの道のどこにおいても守らせてくださる。彼らはあなたをその手にのせて運び／足が石に当たらないように守る。」（詩編91：11, 12）。この詩編全体は、神様の圧倒的な守りについて語るものです。しかし、この所での悪魔のそそのかしは、そのような神様の守りに信頼するのではなく、実際にそのような守りがあるかどうかをあらかじめ確かめてみたらいい、というものです。穏やかに神様に信頼しているよりも、神様の力がいつでも働いているかどうかを確かめようというのです。しかし、そのようにして神様が本当に自分を守るかどうかいつも心配している、というのは、実は神様を全く信用していないということにほかなりません。イエス様が申命記の言葉を引いて「あなたの神である主を試してはならない」といわれたのは、私たち自身の中にある「神さまは私を受け入れて下さっているかどうかわからない」といった不安から自由になるようにとの呼びかけです。試さなくても、神様は見ていてくださるよ、という呼びかけです。

試みは続く

それで最初に戻ります。このルカによる福音書で、悪魔の問いかけは、「神の子なら」でした。何が神の子らしいのか、神の子にふさわしいのか、が問われていました。そして、イエス様はみ言葉をもって、その答えを指し示されました。それは絶えず神様に信頼していく歩みです。一方で今日の最後の13節では、「悪魔はあらゆる誘惑を終えて、時が来るまでイエスを離れた」と結んでいます。「時が来るまで」と続きますから、これで悪魔はいなくなったわけではありません。その意味では、地上の歩みにおいて、イエス様は、悪魔、悪霊といった闇の勢力を斥け続けた、とも言えます。そしてそれは、私たちにとっても同じです。私たちは、このイエス様の踏まれた後を、踏んで地上を歩みます。

神の命と生きる

そのような私たちの中心にあるもの、それは最初にローマ書のみ言葉でしめされた「命の法則」です。それは「罪と死の法則からの解放」です。わたしたちが、イエス様の後に従っている限り、言い換えますと、イエス様と共に生きております限り、その言葉に聞いております限り、私たちは、この「命の法則」の中にあります。そして、私たちの心を殺していく、死の法則、地上のことだけで生きようとする力から自由にされます。そのようにして、私たちは、いまこのところで、生き生きとした神様の命の中に生きていることを改めて知らされるのです。

祈り

父なる神様、あなたのみ名を賛美いたします。新しい年に、新しい教会テーマを与えられ、この一年の歩みを始めていきます。あなたの命をいただく一年にしたいと願っております。あなたは、キリストを通して、この命の道に私たちを招いてくださっておりますことを信じます。様々な試練があることを知っております。けれども、それもあなたが救され、私たちをご自身のものとされるためであると教えていただきました。私たちがいよいよあなたの導きの中で、命溢れる教会を地上に形作ることができますように、日々その交わりを確かになしてください。主イエス・キリストのみ名によって祈ります。  
アーメン